

かさおか

発行所
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66-1311
FAX 66-1314



天に向かって！色づくイチョウ
(11月15日 大教会神苑で)

教祖130年祭に向かって

成人目標

おつとめ奉仕人の増員

立教175年
11月号



立教の元一日について話される大教会長様

前へ前へ

そして「日々のたすけ心の声掛け」

秋季大祭講話

大教会長様

▼「承ける」ことからたすけは始まる

◎立教のタイミング

「我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり。このたび、世界一れつをたすけるために天降つた。みきを神のやしろに貰い受けたい。」

つに、「道具として使おうと思うが、どうか」と尋ねられました。

この道具も、親神様のお言葉を聞いて、最初は断りましたが、やはり、押し問答の末に承知をさせて貰い受け、そして人間創造に取り掛かりました。

◎教祖御身お隠しの元

明治二十年、教祖の御身に身上の上からお伺いを立てたときには、「ろくぢに踏み出す。扉を開いて地を均らそうか、扉を閉まりて地を均らそうか」というお言葉があり、当時の人は意味が解りませんでした。が、「扉開いて」とお返事申しあげたところ、教祖御身お隠しという結果になりました。

これも、親神様が勝手に教祖の御身をお隠しになったのではなくて、人間の答えを受けて、御身お隠し。ろくぢの地に踏み均しに出られる御守護(世界たすけ)が始まりました。

◎「承ける」ことからたすけは始まる

つまり、親神様が、世界一れつをたすけたいという思いを発信され、私たちが、その思いを承けたところから、すべて親神様の御守護・たすけの世界が始まっています。

このお言葉がくだったとき、中山家にもいろいろと事情がありましたので、簡単に承けるわけにはいかず、なかなか承知することができませんでしたが、三日三晩押し問答を繰返す中に、夫・善兵衛様が「みきを差上げます」とお返事をされたのが、今から百七十五年前、天保九年十月二十六日の朝八時頃、『教典』には「天理教は、ここに始まる」と書いてあります。

つまり、「みきを貰い受けたい」というお言葉によって、親神様が、勝手に道を始められたのではなく、親神様のお言葉に対して、夫・善兵衛様が「みきを差上げます」と承知をされたときから、このお道は始まりました。

◎人間創造の始まり

天保九年より遡ること九億九万九千九百九十九年前、親神様が人間創造に当たって、いろんな道具を寄せられました。寄せられた道具一つひとつ

つまり、私たちがこのお道を通る上においては、

旬々にお聞かせいただくをやの声というものを「承知しました」と承けることが大事だということとです。

◎教祖年祭の旬に発布される諭達はをやの声

十年ごとの教祖年祭の旬も、親神様・教祖に、より一層、たすけ一条にお働きいただき、不思議・自由の御守護を現わしていただくと思うなら、まず、諭達を通してをやの声を聞き、そしてそのをやの声を「ハイ」と承けることによって、陽氣ぐらしへグッと近付くことができる旬だと思いません。

諭達をしっかりと承ける、承けた以上はしっかりとつとめる、その心を今からしっかりと作るこゝとが大切であり、そして諭達を承け、「承知しました。やらせてもらいます」と親神様に申しあげることが大切だ、そういう旬だということを心においてもらいたいと思います。

▼陽氣ぐらしに向かう道筋

◎真の「たすかり」とは

その上で、改めて、立教の元一日のをやの思いを思索したいと思います。

このお道を啓められた目的は「世界一れつをたすけるため」です。

人間にとっては、病氣や災難が無くなること

「たすかり」であり、なぜ病氣になり、災難が起るのかが分かってないので、「たすける」と言うとうと神さん任せになってしまうのが人間の常です。しかしながら、親神様のたすけは、真のたすけです。

◎かしのかりもの

病氣や災難が起こってくるのは、親神様が罰を与えてやろう、苦しめてやろうというものではなく、一人ひとりの我が物である心の遣い方を間違えているからです。

だから、先ず心の反省をすることが大事であり、陽氣ぐらしに向かうためには、心の入れ替えをすることが大事だということで、かしのかりものということを教えられています。

◎教祖のひながた

しかしながら、すべてのお話しを聞いたからといって、すっきりと心を入れ替えて陽氣ぐらしの心に切り替わるかといえ、なかなかそうはいかないのが人間の欲の心です。

八つのほのりの説き分けを聞いたからといって、人は腹立ちをする心は治まらないし、恨む心はなかなか消えるものではない。剛氣強欲もなかなか消えるものではない。

元の理の話を聞いて、人間は陽氣ぐらしをする

ために生まれてきたと聞いても、陽氣ぐらしができるとは、なかなかいきません。

話しを聞かせただけでは、なかなかたすけには至らない、通って示さなければ分からないだろうという上から、親神様は教祖のお身体に入り込まれ、神様にしてみれば、通らなくていいものを、わざわざ御自ら五十年のひながたをお示しくださいました。

こうやって日々歩んでいけば、必ずや自分だけでなく世界が陽氣ぐらしの世界に立て替わっていくという、陽氣ぐらしに向かう道を示されました。

▼ひながたに示されるよぶぶくの使命

1. 欲の心を捨て去る

教祖のひながたの第一は「貧のどん底に落ち切られた」という姿でした。

「貧に落ち切らねば、難儀なる者の味が分からん」という意味もあって、貧のどん底に落ち切られました、これは、欲の心を捨て去るといことを教えられたのだと思います。

よくがあるならやめてくれ

かみのうけとりでけんから 九下り目四ツ

よくにきりないどろみづや

こゝろすみきれごくらくや 十下り目四ツ

いくら陽氣ぐらしを要望してみても、欲の心があつたのでは無理だから、この道を通る上で先ず

大事なことは、欲の心を捨て去ることだということを教えられたのだと思います。

戦後は、金が無いどころか、その日に喰うに困るような時代でした。一生懸命働いて、その日に食べていければもうそれで幸せというようなことで、隣近所もたすけ合いながら日々過(こ)していく。家を空にするときも鍵を掛けもせず、扉は開けっ放しでした。

しかし、だんだん小金が貯まって生活が豊かになってくると、ドアに鍵を掛けるようになり、隣近所との付き合いが薄くなってきました。

現代はどうでしょうか。マンションの入口でストップさせられ、部屋に入るにも3つも4つも鍵をしている。隣近所は一体何をしているのか。下手にドアを開けると、隣の人さえも信用できない、というような姿になってきています。

何か一つの物が与われれば、すぐ次の物が欲しくなる。良い物が与われれば、それより良い物が欲しくなる。欲は欲を生んで、正しく「よくにきりないどろみづや」という姿——これが現実の姿でしょう。

それがほ(ほ)りの心遣いになって、我が身が苦しまなければならぬ姿を招いているとするなら、陽気ぐらしに向かうためには、その欲の心を捨て去る、これが大事だと、ひながたの第一のこととして教えられたと思います。

2. 喜びの心を味わう

ひながたの2つ目は、そうすることによって、自ずと心に明るさが生まれ、喜びと感謝の心が湧いてくるということを教えられたのではないのでしょうか。

世界には、枕もとに食物を山ほど積んでも、食べるに食べられず、水も喉を越さんと言うて苦しんでいる人もある。そのことを思えば、わしらは結構や、水を飲めば水の味がする。親神様が結構にお与え下されてある。

伝・3章

欲の心を捨て去ることによって、自ずと心に明るさが生まれ、物や金が無くても、生かされているという喜びが自ずと湧いてくる——それが陽気ぐらしに向かう第一歩だ——ということを、教えられたと思います。

3. 人だすけに歩む

3つ目には、をびやだすけから始まる人だすけ——困っている人を、次から次へと、不思議なたすけ・御守護でもってたすけられました。

教祖にたすけられた人が、教祖の許(もと)に集まってくる。その人たちに、教理を教えられ、たすかる手立てとして、おつとめを教えられました。

その当時のおつとめは、ただ御幣を立てて拍子

木を打って神名を唱えるだけのおつとめでしたが、我が身がたすかるためのおつとめであって、世界だすけのためのおつとめではありませんでした。

たすかりたい人々が、おぢばは元より日本中を走り回って、神名を唱えておたすけに回りました。

そうしてお互いにたすかつてはいきませんが、そのたすかりは、その場限りのたすかりにしかならないことも多かった。自分が困ったときにはたすけるが、普段はしない、ということも少なくはありませんでした。

とてもかみなをよびだせば

はやくこもとへたづねでよ

九下り目十

いたる所で神名を唱えてはいるが、おぢばに帰ってきて、親神様・教祖に御礼を申す人がなかなかいませんでした。

ですから、本気でたすかりたいのなら、世界たすけを願うなら、おぢばに帰れと、わざわざ、ちゃんとみかぐらうたにも述べておられます。

11月23日に別席・ひのきしん団参をしますが、おぢばに帰るといふことも、陽気ぐらしをする上では大事な角目であり、「さあ皆さん、一人でも多くおぢばに帰らしてもらいましょう」と声掛けするなら、おぢばがえりしても大きな意味があるということですよ。

そうしておつとめはつとめてはいましたが、我

が身のたすかりのおつとめであって、世界だすけにはなかなかいきませんでした。

そこで、おさづけを、当時の先生方に授けられるようになりました。

そうになると、今度は、それは自分の力だというふうに勘違いをして、自分が神だと勘違いする人が出てきてしまいました。

その上から、改めて、心のたすかりは何が大切かということ、「人たすけて我が身たすかる」ということを教えられたのではないのでしょうか。

それまでの神名を唱えるだけのおつとめは、一人のできるおつとめであり、我が身たすかりのおつとめです。

今のおつとめは、人が集まって、みんなでつとめるおつとめであり、これは我が身がたすかるためのおつとめではなく、人さんにたすかってもらうためのおつとめ、世界たすけに繋がるおつとめです。

おさづけも、素晴らしい効能の理はあっても、我が身には取り次ぐことはできません。

つとめもさづけも人さんにたすかってもらうための道具立てでしかありません。

これが教祖のひながたの集大成でした。

教祖五十年のひながたの集大成は、つとめとさづけをやりたい、その一点でした。

4. 人だすけのできる人を育て上げる

とするならば、お道を通る私たちのよふぼくの使命は何かと言えば、

ひながたの道を通らねばひながた要らん

M 22・11・7

ひながたを辿ることが、よふぼくとして大切だということなら、日々、①欲の心を捨て去り、②喜び・感謝の心を味わって、そして、③つとめとさづけを通して、人だすけに歩む、プラス、④人だすけをできる人を育てていくことです。

その最後の部分を忘れていなかったでしょうか。教祖130年祭の旬に、改めて思案したい。

教祖120年祭が済んだ後、教祖130年祭に向かっておつとめ奉仕人を御守護いただこう、130年祭のとき、それぞれの教会のおつとめ奉仕人を、120年祭のときより一人でも増やそうと皆さん方に声を掛けました。

多くの方が「簡単なことだ」と仰いましたが、3年経ち、5年経ち、年限が経つと同時に、3人減りました、5人減りました。もう4人も、6人も増やさなければならぬ、そういう声を聞きましました。それぞれの教会が1人増えるどころか、現実には、だんだんに減ってきています。

何故なのでしょう？

全教会ではありませんが、少なくとも、毎年、よふぼくは生まれ、修養科修了者・教人登録者も

確実に増えています。

おつとめ奉仕人がどれだけの数が減ったかは定かではありませんが、間違いなく、それ以上に笠岡としてのよふぼくは増えています。

でも、おつとめ奉仕人は減っているのです。何が足りないのでしょうか。

教祖は、御自らをびやだすけを始めて次々とおたすけをされましたが、それでは足りない、つとめとさづけを通して、おたすけ人を育て上げられました。

実際、教祖御身お隠しの後、療原に火を放つように世界中のよふぼくがおたすけに走り回りました。別科(修養科の前身)が終わって帰ったら、もう直ぐ早速にいがけ・おたすけに歩き回られた。

どこかで、初席者ができた、よふぼくができた、修養科生が一人修了した、ということに満足してしまつてはいないでしょうか。

それらを通して、一人ひとりがおたすけ人になつてもらうというところまで、思いが至つていなかったのではないのでしょうか。

おぢばがえりに一人誘うのも、別席を運んでもらうのも大変なことですが、おたすけ人にまで育て上げるという最終的な目的を持つておかなければ、一つひとつが、世界たすけというをやる思いに添いきれない姿になってしまう、ということを中心に置いて、年祭の旬は「おたすけ人を育て上げ

るための苦勞をする旬」だということを心に置きたいと思います。

教祖の五十年のひながたは、正しく、おたすけ人を作る、そこに五十年のひながたがあったと思います。

▼日々のたすけ心の声掛け

◎おつとめはたすけの元立て

それぞれの教会の、修養科を修了された方、あるいは、おさづけを拝戴された方が、間違いなくおたすけ人になったなら、おつとめ奉仕人は増えているはずです。

なぜなら、おつとめはたすけの元立てであり、おさづけをお取り次ぎするためには、おつとめをつとめなければいけないからです。

— 例えば、仕事の都合で、どうしても祭典をつとめられないとしても、人にたすかってもらいたい、おさづけに十分に働いていただくためには、おつとめの理を頂戴したいと思うなら、祭典にはつとめられなくても、祭典の前日に祭典の準備をしよう、仕事が終わってから、夜に教会に行つて後片付けをしよう。そうやってでも、おつとめの理を頂戴してもらいたい。— おたすけ人なら、そうなるはずです。

修養科を修了して、1・2ヶ月はつとめても、だんだん都合が悪くなったりするのは、間違いな

く、そこからのおたすけ人に育て上げるというところが欠けてしまっているからではないでしょうか。

「よ、ふ、くになる」ことだけで満足してしまつて、一番大事な「おたすけ人に育て上げる」ところまでいききれない姿が、奉仕人が増えてない姿にあるのではないのでしょうか。

◎前へ前へ— 勢いのある人を増やそう

祭典に参拝して、おつとめの理を真つ先に頂戴したいと思うなら、自ずと、前へ前へと来て、境界の前に座るのではないのでしょうか。

我が身がたすかりたいだけなら、後ろの方で参拝してもらってもいいかも知れませんが、人にたすかつてもらいたい、何とか神様に働いてもらいたいと思つたら、自ずと、前へ前へと心が向き、身体が行くのではないのでしょうか。

大教会でも、普段は、椅子席を、後ろの方に置いてありますが、今日は、前の方に置きました。

椅子が後ろに置いてあるから、止むなく後ろで参拝しているが、本当は前で参拝したいというよな方もおられまいかということで、今月から椅子席を前の方にしました。

ある先生が、真柱様に、「真柱様は日本国内は元より世界中いろんな教会に行かれますが、勢いのある教会とそうでない教会の違いは、どうい

ところにあるのでしょうか」とお尋ねされたところ、「教会に違いは一つもない。違いがあるとすれば、祭典のときに、参拝場の前から埋まるか後ろから埋まるかの違いだ。」と仰つたそうです。

それぞれの教会も、参拝者が少ないかも知れませんが、椅子席も全部前に、境界前に出しませんか！

教会に参拝した人が、前から前から埋まるような、たすけ心を持った、勢いのある人を増やしていくようにしていきませんか！

これは形だけのものではなく、心からそういう形になっていくことが大事なことはなかるうかと思ひます。

◎日々のたすけ心の涵養、たすけ心を声掛け

今、世の中は、どんどん、陽気ぐらしとは逆の方向に向かつていくように思われます。

人をたすける心がなくなったときに、いろんな災いが起こり、苦しまなければなくなるわけですから、一人ひとりの心の中に、人をたすける心を、いかに持つてもらおうかが、大切なことではないかと思ひます。

こういう今の旬だからこそ、人をたすける心を一人ひとりが持つことが大切だということを、改めて心に置いて、共々に、教祖130年祭に向かって、たすけ人を育てる、その目的を持って、日々しつ

かりと辿りたいと思います。
 そのためには、日々の歩み、日々のたすけ心の涵養が大切になってきます。そして、このたすけ心をただ持つだけではなく、その日々のたすけ心を、少しでも、一人でも多くの人に声掛けをしていくということ。

教祖130年祭に向かって「日々の理づくり」と申し合わせていますが、それに加えて、今度は「日々のたすけ心の声掛け」、これに加えて、130年祭に向かう中に、1回でも多くおさづけを取り次ぐ機会になれば、親神様・教祖にお喜びいただける姿になると思います。
《以上要約》

よふぼく勉強会開催

テーマは「元一日について」

10月月次祭後

育成部(吉岡壽部長)では10月21日、大教会10月月次祭後、会議室で「よふぼく勉強会」を開催、約30人が参加した。今回のテーマは「元一日」

講師の河原節喜先生は、天理教の元一日について説かれ、またそれぞれに入信の元一日、個々の生まれた日、結婚の日、人生の節目の一日もまた元一日と話された。

そして本席様が「昔を忘れないように」とのお

言葉に触れられ、今は結構に暮らしているけれど、初代、二代と続く先祖の元一日を忘れないようにと結ばれた。

引き続き約30分、同テーマについての質疑応答が行われ、参加者は熱心に受講した。勉強会に先立ち月次祭終了後、神殿で同部おたすけ掛員より一人におさづけが取り次がれた。なお11月の勉強会は休講。おさづけの取次は行われず。



秋季大祭

「おかえり講話」開催

布教部(田中隆之部長)では10月25日、午後7時から詰所3階講堂で、永井芳樹先生を講師に迎え「おかえり講話」を開催、宿泊者など約180人が参加した。

先生は冒頭、若い時の自身の体験から「どんな

ご用も、その人に与わる大事な旬の声と受け取り、低い心で素直に通らせて頂くことの大切さ」を述べられた。

そして教祖130年祭に向けては「三年千日という月日は、歳を重ねている人程、早く感じられるものだから、一日一日を教祖、真柱様の思召しに添えるよう心定めをして通ることが大切であり、それが継続できるということが重要」と話された。

最後に「年祭活動を晴れ晴れと心残りなくやらせて頂くことができて良かったな、という気持ちで教祖130年祭を迎えさせて頂きたい」と締めくくられた。



お話くださる永井先生

諭達御発布の翌日に開催

第88回 天理教青年会 総会

10月27日におちばで開催された「第88回天理教青年会総会」に、笠岡分会(上原明勇委員長)からも、各ブロックより参加があった。(参加人数は11月末発表)

笠岡分会では、本部総会と分会総会への動員に向け、9月に直轄教会へ巡回を実施。更に、全会員にハガキを出し呼びかけを行ってきた。



全ブロックより参集

当日は、快晴の空の下、青年会長様よりお言葉を頂き、おちばにかえり集った会員同士、年祭へ向け、意気と情熱を持って活動に取り組む事を誓い合った。

5年連続で出場

第39回 全教野球大会

笠岡
ワールド
ブラザーズ

笠岡ワールドブラザーズ(平盛秀年監督)は、10月29日よりおちばで開催された「第39回全教野球



上原志郎主将が記念盾を受け取る



ワールドブラザーズの精鋭たち

始劣勢に。それでもタイムリーヒットで1点を返し、意地を見せた。(試合は1対8で敗戦)

笠岡ワールドブラザーズでは、ここ数年で若い選手が少しずつ増えており、来年以降も楽しみなチームとなった。また、共に野球を通してつながる、ようぼく選手を募集している。

大会」に、岡山代表として5年連続16回目の出場をした。

今大会は、雨により開催が1日順延となり、棄権するチームが出てくる中での、変則的な日程で行われた。開会式では、5年連続出場の記念盾が授与された。

前日の雨でグラウンド状況が悪い中、初戦は熊本大教会と対戦した。打線は、初回よりコンスタントに点を積み重ね、守備も安定。9対0で、ワールド勝ちを収めた。続いてこの日2試合目となる対戦相手は、優勝候補の高安大教会。大阪代表のチームとあって、投打にレベルが高く、笠岡は終

年祭活動開始の旬に開催

青年会笠岡分会総会

青年会笠岡分会(上原明勇委員長)は、11月4日、大教会で『青年会笠岡分会 総会』を開催。大教会からの遠近を問わず、教会ぐるみ家族連れなど合わせて196名(うち青年会員95名)の参加があった。

この度の総会は祭儀式を行い、各ブロックから選抜された楽人の雅楽演奏の中、厳かな雰囲気スタートとなった。おつとめまなびでは、一同真剣に勤め、一手一つにおうたを唱和する声が殿内に響いた。

式典の部では、青年会長様御告示(杉原副委員



各ブロックごとにつとめられたおつとめまなび



会員に向け挨拶する上原委員長



ヤッター!! (ラムネ早飲み対決)

長代読)に続いて、大教会会長様より祝辞があった。その中で大教会会長様は、論達発布直後の11月4日という日付は、親神様が決めて下さった日であると述べられ、青年会が、笠岡の先頭に立って年祭活動に励み、あらかとりの本分を發揮するよう諭された。

続いて委員長が、百二十年祭へ向かう第一歩を、早々と踏み出せた事は、大きな喜びである。年祭に向けて、しっかりとおたすけに励みましょうと挨拶をした。

午後からは、「笠岡オリンピック」と称した、ブロック対抗の室内競技を開催。ラムネ早飲み対決や万歩計腰振り対決など計6種目を行い、福山ブロックが優勝に輝いた。その後は、大抽選会を行うなど、大いに盛り上がった一日となった。

<会計部>

- お節会、本部献灯料について
 - ・3000円納入してください。

- 仕切りについて

- ・12月は本年最後の仕切り月です。よろしく願いいたします。

<史料部>

- 教会長履歴書の提出について
 - ・12月21日〆切です。

<詰所掛>

- 年末年始の詰所宿泊申込みについて

- ・正月3日間は食事が無いので宿泊される方は12月20日迄に詰所に申し込んで下さい。

温故知新

いきいきエピソード 19

初代会長様の想い出 岡崎幸逸

前号の最後に四十年祭から五十年祭の歩みを振り返ってみたいと書いた。丁度、今大教会史本文の昭和四十七年から下書き作成中で、「かさおか」等の史料を見ていたら、昭和四十七年の初代会長三十年祭・朝子夫人二十年祭の記事が載っていて、当日式後初代会長の想い出を語って下さった方々の話が収録されている。それで今回から暫くその方々の語る処に耳を傾けてみたいと思う。以前門脇一教先生の当日の話を収録したが、ここに載せるのは、「かさおか」編集部が原稿依頼したものと思われる。

まずは、岡崎幸逸先生である。

初代様と申し上げるよりは、旧長様とお呼びしておりましたので、その方が何か懐かしみを覚えます。

笠岡が分教会当時、大正十三年四月十八日、教祖殿と初代様のお休み頂く室の落成奉告祭が行われました。初代様は大阪新町にある芦津大

教会で、七十四歳のお歳を召しても御元気で勤め頂いておりましたが、笠岡へお帰り頂いても落ち着いて休んで頂く室がありません。それで教祖殿と初代様の室が第一期工事として完成されたのであります。

大正十五年十月に私が大阪へ布教に出させて頂きました時にも、芦津大教会にお勤め下さっておられました初代様に、「よく布教に出て来たなあ。しつかりおやり」とお励まし頂き、親心溢れるお言葉に何にも代え難い勇気が湧いてきたのを思い出します。又、芦津大教会の勤めの暇に、笠岡の道に繋がる大阪に居る人々の宅へお運び頂きお育て下さった。或日、芦津大教会へ私をお呼び頂き、お伺い致しますと、皿、鉢、砂糖壺等を下さり、「心を倒さずしつかり布教させて貰いなさい」とお言葉を戴いて嬉しさに涙した時もありました。

笠岡へ帰られてからも、帰会の挨拶等でお部屋にお伺いすると、「誰もおらん時に来いや。誰にも言うな」と反物やお金を包んで「内緒やで」とそつと下さった事が幾度あったか分かりません。又「教会へは、たとえどんな格好した人が尋ねて来ても粗末に扱ってくれなよ。その

人を教会へ足を運ぶようにした布教師の苦勞を考えてみよ。決して粗末に出来んで」とお教え戴いた事は私の肝に銘じております。又「苦勞すまいと思うたら苦勞するんやで。苦勞しようと思えば、何もかも嬉しく楽しみになり、苦勞ないようになるんやで。苦勞と楽しみは紙一重やで」とお聞かせ頂きました。

今でも勿体なく思いますのは、初代様が二代・伊助先生に会長を譲られてずつと後、私の父(岡崎時之祐)は広島布教をしておりましたが、大教会の都合で笠岡へ引き揚げるようご命を戴いて帰り、広島道がそのままになっておりまして、これでは申し訳ないと、初代様が広島に自ら布教にお出で下され、持ち物をすっかり尽くされ裸になってまで信者をお育て頂いた事があります。明治四十年六月九日御本席様が出直されたという報せに急いでお帰りになられましたが、半年ほど広島で布教頂いたものですから、広島の人がいともお徳を慕っておりました。広真分教会(ひろさと分教会)の奉告祭の時、初代様は、益本老母や数人がお供をして比治山へ登られた事があります。初代様は若い人に心配をかけまいと急いで登られたので、お顔が真っ青

になられ、途中から私が背中に負わせて頂いて上へ登らせて頂き、しばらくお休み頂いてお楽になって頂きました。又私は大阪布教中、よく自転車で笠岡へ帰っておりましたが、或時笠岡で目にかかると、「自転車には乗ってくれない。危ないから」とお心を遣って頂いた上、「実は先日苜品の会長さんが信者二、三人とおぢばへ自転車で帰られ、奈良へ廻って春日さんの方へ行つて、信者の一人がブレーキが利かなくなり、畑の土手へ突き上げて片手を痛めて片一方の手で運転しようやく苜津へ帰った。どうか危ないからくれぐれも用心するように」とご注意頂いた事も今は懐かしい思い出と共に勿体ない心がよみがえります。

に、どんな苦労もお通り頂いた訳ですが、笠岡へお帰り頂いたのは三十六歳で姑八重様は六十四歳でお出直しになり、舅佐吉様は七十一歳になっておられました。舅様にもよくお仕えされながらお子らを育まれつつ、女の身で笠岡の道をお開き頂いたのであります。神様の理は何処までも絶対に理を立てぬかれたのですが、又一方では人の心の底まで入り込んでお心におかけ頂きました。お目にかかった人は誰でもあの温かい親心に包まれて嬉しい心で帰りました。あの温情溢れたお人柄に触れた人々は、生涯ほのぼのとした暖かさに感じ入った事でしょう。

晩年のお顔には苦勞艱難の道を通り抜けられた面影はなく、神々しいような崇高な暖かいお姿をのみ拝しました。静かに初代様が、

「しっかりとしいや」と微笑みつつお励まし下さっているお姿を臉に浮かべつつ想い出の一端を思い出すままに綴らせて頂きました。(前史料集成部長)

こころの詩

▼天理教道友社発行『天理時報』、「時報歌壇」・「時報俳壇」より転載

▽笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されてきましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

10月21日付 海松ヶ岡分教会 池田 広子さん

時間かけやっとメールを送信す

絵文字も書けず用件のみを

10月28日付 備中分教会 塩飽 利子さん

百選の棚田の景や曼珠沙華

▼養徳社発行『陽気』誌十一月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「昇」、笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されてきましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

佳 詠 東悠分教会前会長夫人 田林美智子さん

四季の守護名物供え旅語る

▼表紙写真 (吉岡輝昭かさおか編集部)

野津正樹氏 書作展

十一月一日から七日まで一畑百貨店 松江店 五階美術サロンで「暮らしの中の書」と題して野津正樹書展が開催された(米子美術館にも同時出展)

野津正樹先生は昨年、一年間の長丁場を「か



野津正樹先生と「暮らしの中の書」の大作

さおか誌」の表紙を飾って下さり、島根の爽やかな風を書作し季節の趣をしたため、届けて頂きました。履歴は前回の記事で紹介致しております。

今回は、年代物の硯や墨も同時に展示しており、中国の明の時代の丸型墨(約百万円以上)や、硯も(六十万以上)と貴重な道具ばかりで、見る人毎の質問に笑顔で答えて居られるのです。

「暮らしの中の書」と云う事で、掛け軸から色紙大など各種、即売もされており、十五〜五十万円の力作を、二日目ですでに半数近くが売約していました。「萬佐」正樹の正を考案した筆名に、純金で書いた「般若心経」や小さな文字は、一字が何千円! 字そのものの価値も付加される。その書が人気を誘い、訪れる人の目を引いていた。

約一年前から企画して課題に沿って書き始めたが「書いた時より、後に成って作風が判るので書き直す事もある」と、また「大きい字が得意と思っていたが、今回の小さな印字の様な書も出来るとは、私は知らなかった」と実のお姉さん談。

軸物の紙は、百年以上前の中国の物で、超薄いベンガラ色の版面が押してあり、作者の落款



展示場で来客に対応する野津正樹先生(中央)

もある。そこに「したためる」書は高価な書物となるのです。薄い墨で書いた大きな書画は「小指」くらいの細い筆字が、時間経過とともに滲み出て全体の形が現れるので、時として書き直し作り上げるそうです。展示会の全てが作風であらう。

一芸に秀でる者は、天性と日々の努力の賜物であり、それを企てる器量も備えているのでしよう。

ともあれ、盛況を感じ取りサロンを後にした。

秋季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長上原理一慎んで申し上げます

親神様には 人間の陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいと思召から次々と道具をお引き寄せになり 守護を教え八千八度の生まれ替わりを経てこの世と人間世界をお創造になられたばかりでなく 火水風を始め十全の御守護で以てお育て下さっております 加えて天保九年教祖を月日のやしろにお定めになり 万一切の真実を明かされて 世界たすけのこの道をおつけ下さいました事は誠に有難く 私共は喜び感謝の心一杯に朝に夕に御礼申し上げると共に 「世界一列を救いたい」との親心にお応えすべく 日々は御恩報じを思い念じてたすけ一条の御用の上に勤め励まして頂いております

その中 今月二十六日日本部に於きましては 立教の元一日を記念して秋の大祭が執り行われますが 当教会でも理のお許しを戴いて 今日の日只今からおつとめ奉仕人一同慶び心も一入に 明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて秋の大祭を執り行わせて頂きます 御前には深まりゆく秋を楽しみつつ今日の日を心待ちにして 寄り集いました道の子供達が相共にお歌を唱和し 立教に込められた親心に思いを致し 心も改たに思召に添い切る事をお誓い申し上げる状を御覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さていよいよ五日後にせまつた本部の秋の大祭で教祖百三十年祭に向けての諭達のご発布がございます 誘い合わせておちばに帰らせて頂いて 共々に諭達を拜聴させて頂き 諭達に込められた思いをしつかりと受け止めさせて頂いて 思いも新たに教祖百三十年祭に向け成人の歩みを進めさせて頂く覚悟でございます

又その上から十一月二十日に本部巡教を受けさせて頂き 二十三日には別席ひのきしん団参を実施させて頂きます

何卒親神様には 教祖百三十年祭に向け心を一つに睦び合わせて たすけ一条に邁進する皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上にも尚も自由の御守護を賜り共にお助けをする人が 弥増してお望み下さる陽気ぐらしの世の状に 一日も早く立て替わりますようお願いの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

立教百七十五年 秋季大祭 祭典役割表

控	胡	三	小	す	太	拍	ち	笛	お	地	役割		講	祭								
											話	主		者	者							
え	弓	線	琴	りがね	鼓	子木	ちゃんぽん		つとめ	方	区分	話	主	者	者							
中村義太郎	今川佐智子	虫明好美	上原順子	杉原博之	内海史郎	三島渉	河原節喜	上原澄雄	中島誠治	門脇郁子	田中ますみ	大教会奥様	上原繁道	岡本久善	大教会長様	山野弘実	森本忠平	吉岡壽	大教会長様	佐藤道孝	吉岡壽	
	森本富美子	笹尾一美	佐藤香苗	上原浩彦	岡崎輝彦	吉岡誠一郎	中村道徳	西江昌直	武内清明	谷内美知子	内海安子	武内正美	上原志郎	岡崎真一	岡本久善	今川昌彦	笹尾正治	中村邦義	前	指	贊	者
	横山小智榮	三島照美	岡崎豊子	赤木素志	田林久嗣	山田敏教	虫明立生	浅野明教	高木昭祥	中村初美	高木孝子	門脇加津	門脇元教	岡崎和夫	佐藤道孝	森本忠善	田中隆之	中村剛	後	方	者	者
																岡本久善	上原繁道	田中隆之	上原志郎			

教会おとまり会の報告

▼福東隊

実施日 平成24年8月30日～31日

参加者数 少年会員12名 育成会員6名

合計18名

プログラム

30日 16:00 教会集合ゲーム、ソング

17:00 夕食

入浴

18:30 夕づとめ教話

19:30 ビデオ上映

22:00 消灯

31日 6:30 起床洗面

7:00 朝づとめ

朝食

8:30 おつとめ練習

9:30 部屋掃除

10:30 プール

12:30 昼食

解散

所感 予想を上回る数の御守護を頂き、賑やかにつとめさせて頂くことができました。小

学生の低学年が主体ということで、ゲームや体を使った歌などを利用して楽しく過ごしました。大切なおつとめ練習にもっと工夫をつけて指導できたらと思います。夏休み最後の楽しい思い出になったのではないかと思います。ありがとうございました。

▼引野隊

実施日 平成24年9月8日(土)

参加者数 少年会員5名 育成会員5名

合計10名

プログラム

午前10時頃～午後14時30分頃まで実施しました。

少年会員と育成会員で座りづとめを勤めました。

今年の子供団参のビデオ見ながら、歌を歌いました。

お昼は、育成会員で作り、少年会員にもお手伝いをしてもらいました。

昼食後は後かたづけをして、少年会員は、自由に、皆で遊びました。

育成会員は雑談です。

所感 少年会員は5才未満ですので、親と共に教会へ上記のような参拝することが大事だ

と常に思っていますので、簡単な、楽な予定にしております。顔を合わせて、親は親同士で話したり、子供は子供同士で、遊ぶことを、今は考えてます。これからですので、ぼちぼちと、考えながら、実施してゆきたいです。



「親の顔が見たい」とは、育てた親の顔を見たの意味で、よその子の言動に呆れて発する言葉であるが、私は我が子に対して云っている。そんな父親がいますか？ 現にここにいますが……

しつけの悪い我が子の言動に、あきれて「親の顔がみたいよのおう！」と一言。それを聞いた子供たちはポカーンとしている。訳が分かっているのやら、分からないのやら……

その我が子の姿を見て、私が最後に一言。「情けねえ」と。そう聞いた子供たちは、またもポカーンの態度。自虐ネタになるのかな？ (か)

